

# 有権者にとっての選挙の位置づけ ～人生の中で投票にはどのような意義があるのか～

1220522 西本 恵哉

指導教員 肥前 洋一

## 1. 研究背景

高齢者の投票率は投票率調査が行われ始めた1967年から、若い世代に比べると高い傾向がある。総務省のデータでは、1967年の衆議院選挙の20代の投票率は66.69%であり、当時の20代が70代となった2017年の衆議院選挙では70代の投票率は72.34%へと上昇している。これは若い世代が年を取るにつれて投票に行く割合が増えていくことを表している。他の世代でも同様の傾向がみられる。このことから、有権者は年齢を重ねることでライフステージの変化や社会的背景などの影響により、自身の中での選挙の位置づけも変化しているのではないかと考えられる。

## 2. 研究目的

有権者の人生の中での選挙の位置づけは変化するのか否か、変化するのであれば、こういった要因でどのように変化していくのかを明らかにする。

## 3. 調査・分析方法

### ①インタビュー調査

高知県在住の高齢者（65歳以上）の有権者を対象に「選挙の位置づけ」に関するインタビューを行う。

### ②内容の考察（個人）

インタビュー内容の記録を基に、選挙の位置づけの変化を経済学、心理学、社会学の3つの観点を取り入れながら考察する。

### ③内容の考察（全体）

5人のインタビュー内容から共通して言えることを考察する。

## 4. 結果

①5人中4人が、社会学的要因により選挙の位置づけが変化した。または形成された。

②社会的背景は有権者の選挙の位置づけにあまり影響を及ぼしていない。

③5人中4人にとっての選挙の位置づけに「義務」という言葉が出てきた。

## 5. 結論と含意

上記の結果から、有権者の選挙の位置づけは変化するが、一度形成されれば安定的であること、また社会学的要因により変化・形成されやすいことが示された。現代の若者は政治に関心を向けるための社会学的要因に恵まれておらず、政治への関心や投票率が高まっていない可能性がある。

## 6. 課題

今後の課題として、一つ目はインタビュー調査を採用したことによるサンプル数の少なさ、二つ目はインタビュー対象者の居住地域が高知県内限定となっていることから起こるセレクションバイアスが挙げられる。より汎用性の高い結果を得るためにはサンプル数の増加、対象地域の拡大、アンケート調査などによる定量的分析などを行う必要がある。